2017 年度 春季第 2 回

日時 : 5 月 17 日（水）17 時 00 分～
場所 : 自然系学系棟 B 棟 114 教室

地質学セミナー

インドネシア・スラウェシ島における旧石器時代のランドスケープ論

発表者①　五十嵐あゆみ　（地圏変遷科学分野 M1）

インドネシア・スラウェシ島南部の石灰岩地帯の洞窟群は、約 40,000 年前から人々に、主に住居として利用されていたと考えられている。内部からは貝類、石器、動物骨が出土し、壁や天井には手形やスラウェシ島固有の動物の壁画が描かれていることもある。Aubert らは遺跡内部の壁画の調査を行い、40,000 年前から 20,000 年前のものであると主張している (Arbert.et al. 2014)。一方、出土した貝類をサンプルにした年代測定では 35,000 年より前の年代は出ていない。遺跡が利用され始めた更新世後期から完新世初期までの洞窟利用の実態はよくわかっていないのが実情である。本研究では、40,000 年前から 20.000 年前の遺跡周辺の環境の復元を行い、その環境の中で人々がどのように生活していたのかを食料獲得、住居の選択、石器石材の獲得の観点から考えた。

現在水田や住宅地の開発に伴い、スラウェシ島南部の平地の元来の植生はほとんど残っていない（ムナフリ　2010）。しかし、30,000 年前 から 20,000 年前にはヤシ科植物などの森林が広がっていたのではないかと推測される。また、当時の気候が現在よりも寒冷だったことから、洞窟遺跡群から海岸線までの距離は現在よりも数十キロ離れていたと考えられる。

Clason(1981) は遺跡から出土した動物骨の分類を行った。Clason の研究によると、当時の人々は洞窟周辺で入手できる哺乳類や貝類、植物を食料として利用していた。森林の破壊により現在南スラウェシでは絶滅した、アノア、セレベスイノシシ、バビルサなどの大型哺乳類の骨も遺跡から出土している。これらの動物は洞窟内の壁画に描かれることから、他の動物よりも、重要視されていた可能性がある。

また、洞窟の周囲の淡水生の貝類も食料になっていた。最寒冷期の海抜が現在より 120m 低いとすると、遺跡から海岸線までの距離は 50km 近くになる (現在は 15km ほど)。更新世後期の遺跡からは、海水生の貝類がほとんど出土しないことからも、当時の人々は遺跡周辺で採取できる淡水生の貝類を主に利用していたと考えられる。

この地域の人々は、層状チャートではなく、石灰岩中の珪質ノジュールを石器の主な材料にしていた。しかし珪質ノジュールの露頭は南部の遺跡群周辺にはみられず、石器は離れた場所から持ち込まれた可能性がある。北部の遺跡群周辺には珪質ノジュールの露頭があり、洞窟群から遠く離れることなく、石材を入手することが可能である。

Tille Site (Rala) のように、遺跡群のさらに北部にも珪質ノジュールの露頭があるが、この露頭の岩石を洞窟遺跡群に暮らしていた人々が利用したかははっきりとは分からない。しかし、採取できる珪質ノジュールのクオリティーの高さや、露頭付近に石器を製作した跡が大規模に広がっていることから、重要な石材の生産地であったと考えられる。